
なにかのはじまり

べあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なにかのはじまり

【Nコード】

N0350K

【作者名】

べあ

【あらすじ】

恋が生まれるよりも前の、小さな小さなきっかけたち。
学生が引き起こす微妙なフラグを集めてみました。

図書館にて（１）

柔らかな光を投げかける照明に、紙特有の懐かしい香り。時折、ハラリと本をめくる音がする。

理子にとって、図書館ほど心が安らぐ場所は無かった。外の世界のようにけたたましく笑う同級生は居ないし、口を閉ざしている限り、静かにそして優しく、誰でも受け入れてくれる。好きなだけ、大好きな物語の世界に浸っていられる。

なんて理想的な場所なんだろう！まるで私のために作ったみたいなお環境だなぁ。

（それなのに…。）

理子は、目の前に大きく開かれている化学の問題集を睨み、顔をしかめた。

18才なんて人生の絶頂期、バラ色の青春のはずなのに、なんで貴重な日曜日にこんな事しなきゃいけないんだろ。何が悲しくて大好きな図書館で化学しなくちゃいけないんだ！！

あーもうっ！

…と頭を掻きむしりたい衝動に駆られたが、周りでカリカリ鉛筆を走らせている受験生達に怪しまれることはしたくない。図書館の長机の向かいの人が、自分と同じ問題集を使っているのに気がついて、何故だか分からないけど憂鬱な気分になる。

理子は小さく「はぁ」とため息をついた。

成績は、悪い方ではない。昔から好奇心が強く、ありふれた雑草や昆虫の名前を図鑑で調べるのが大好きなタイプだった。

小さい頃から理科が好きだったので、高3になってから理系を選択した。でも、本当にそれで良かったのかは正直分からない。

（なんだかなあ。）

理子は、小さくなった消しゴムを指先で転がした。

縦長だった消しゴムが正方形に近い。そろそろケースを取りはずす頃合いだ。

理子は指先でケースを摘んで抜きつつ、ぼんやりと考えていた。

成長していくにつれて、少しずつ、自分の将来の可能性が減っていくのが実感できる。

（ ていうか私には、理系の学部に進んで会社に就職するって道しか残されてないってことじゃん。もちろん自分で選んだ事はあるから不満はないはずなのに…これが大人になるって事なのかなあ。）

その時、指先を滑った消しゴムが、勢いよくコロコロと前の方に転がった。

あっと思い、慌てて止めようとしたが遅かった。

消しゴムは理子の問題集を通りこし、弾みながら向かいの人の問題集までも乗り越え、相手の膝にぽんと落ちた。

（あちゃー…）

目の前の問題集の上を通過していったのだから気がつかないはずがないのに、相手は平然と鉛筆を動かし続けている。

（ちょ、無反応。どうすればいいんだろう…）

理子は密かに相手を観察した。どこにでも居るような、ごくふつうの男子。

短い髪と、10月半ばにも関わらず日に焼けた肌を見ると運動部だったらしい。ノートを滑る鉛筆を真剣に追っていた目がチラリと机の下を向いた。

（あーもしかして）

あった。膝ではねた消しゴムは、机の下に落ちていた。

理子は机の下に潜り込み、ホコリまみれのそれを素早く拾い上げた。なんだか悔しい。相手に非はないのに。

（これだから受験は嫌なんだ。こんな微妙な場所で勉強しなくちゃいけないし、かといって家だとはかどらないし。消しゴム転がったくらいで何でこんなに気を使わなきゃいけないんだ！ああもう本が読みたい。ここは図書館なのに！）

まるで水不足に陥った遭難船だ。周りは本だらけなのに読むことができない。

さきほどから全く進んでいない自分のノートを見て理子はまた一つ溜め息をついた。

図書館にて(2)

図書館の裏庭に沿ってのびる砂利道をしばらく進むと、行き止まりに小さな木のベンチがある。

この場所で弁当を食べるのが、理子の習慣になりつつあった。

図書館の表に出れば噴水横に丸テーブル付きの椅子もあったが、もっと静かで日の当たりがよいベンチの方が理子は好きだった。

1匹の野良猫がツツジの茂みの間をのんびり歩いていく。1m先で人間が食事をしていても気にも留めずにしなやかに低木の間を抜ける。そんな姿が何だか羨ましかった。

(私が理学部に行きたいのは、理科が好きだし得意だから。そして就職も安定してるから。でも、本当にそんな理由で一生の進路を決めて良かったのかな。もし大学に行ったとして途中で興味を失くしてしまったなら、私は何を抛り所に生きていけばいいんだろう。)

ていうか、私の抛り所って理科だったの？それって少し笑える。こんな事を考えてしまうのは、見えない将来への恐怖からか、それとも唯の現実逃避か。

本当は、本当はわたしは…………。

その時、砂利道をザクザクと踏みしめる音が聞こえた。ふと顔を上げると、さきほどの相手がこちらに向かってくる。

(げ、さっきの人が何故ここに…！)

相手はこちらの姿を認めると、やはり「何故ここに」という顔付きをした。自分の顔を鏡に写したら、きつと似たような表情をしているだろうと理子は思った。

左手にはコンビニの袋。右手にはペットボトル。このベンチで昼食を取ろうとしていたのは明らかだ。

硬直する理子をよそに、彼は軽く会釈をして来た道を引き返そうとしたが、また振り返って唐突に口を開いた。

図書館にて(3)

「あの、さつきはすいません」
「え」

相手が去ろうとしたのでホツとしたのもつかの間。理子はギクツと身を竦めた。
これではだるまさんが転んだ状態だ。

「…消しゴムのことで」
「あー」

(やっぱり気がついてたんだ。)

別にそんな事気にしなくていいのに、気にするなら拾ってくれば良いのに……と思いつつも、同じく気にかけていた自分を思い出すと可笑しくなった。

「いや、あれは私が消しゴムで遊んでたせいだから気にしないでください」

「え、遊んでたんですか？」

厭味ではない、少し面白がるような口調。
何だか変な人、どこか私と似ているかもしれない…と理子は直感的に思った。

「考え事する時に、消しゴムで遊ぶ癖があるんですね。」
「ふーん…僕は紙の端にたくさん〝正〟を書く癖があるけど」

「ちょ、何それ」

つい本音が口から出てしまった。

これは確実に変な人だ。

「あの、ここにお昼食べにきたんでしょ？ 去った方が良いですか？」
「や、全然、べつに去らなくても良いよ。君も食べ終わってないのに…」

今度こそ引き返すのかと思ったら、逆に近づいてきて隣に腰掛ける。

（うわ、何なんだこの展開は！ 見ず知らずの受験生とピクニックする事になるとは…）

うわーっ！

…と頭を掻きむしりたくなる。本日二回目だ。

男子と弁当を食べるなんて人生初めてだ。理子は表面状は落ちついて見えるように取り繕った。

「ごめん、僕もここに居て良い？ この場所でよく昼食べてるんだ」

「へえ、私以外にもここで食べる人居たんだ。」

「や、表だとか落ち着かなくて。ここ猫が日向ぼっこしてて和むんだよね」

猫かよ！！という突っ込みは我慢。

この場所が好きだという事に親近感を感じた。

「あーなんか分かる。ここの猫って、人が居ても全く気にしてないですよ。かといって近づく歩いて逃げるのがなんとも」

「そうそう、きっかり2mくらい保って逃げるんだよね！」

「え、追いかけたことあるんですか？」

「『耳をすませば』みたいで端から見たら痛いから途中で止めたんだけど」

「あはは」

真面目な顔をして猫を追いかけて、我に返るこの人を想像すると可笑しい。

顔が自然と綻ぶのは久しぶりだった。

図書館にて(3)(後書き)

これ絶対フラグじゃないよ...orz

この後、グダグダした会話が続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0350k/>

なにかのはじまり

2011年1月25日02時29分発行